2001年度コミュニティ福祉学部研究センター研究会報告　2001年12月14日

宗教人間学の視座　―そこからイエスを見ると

Jesus of Nazareth from the Viewpoint of Religious Anthropology

佐藤　研　Migaku Sato

1.「宗教人間学」とは

「宗教人間学」には、２つの側面がある。

（1）人間を宗教という視点から見るという側面。これには、広義の意味合いと狭義のそれとがある。前者は、例えば、「根源的なるものとの邂逅とそれへの応答」というふうに仮に定義づけられよう。そのような視点から人間を見たらどうなるか、という探究として、「宗教人間学」をとらえうる。後者はいわゆる宗教体制という意味である。その中での人間の在りようを問うという意味にも、「宗教人間学」は理解しうる。

（2）宗教を人間学的視座から見るという側面からいえば、傾向的に二つの態度があり得る。①宗教を「理解」するというスタンス。つまり、非常に好意的に宗教現象や宗教体制を内側から理解していこう、そして他の人にも分かる言語で開陳しようという方法である。心理学的な方法、倫理学的な方法など、さまざまな接近法がありうる。②宗教を「解剖」・「批判」するというあり方。これは、①に加えて、方法論的に宗教を批判的・解体的に観察する方法である。これに近い一例が、聖書学である。以下は、この（2）の側面から、それもどちらかというと②に近い立場から述べる一例である。

2. キリスト教をどう見るか

キリスト教をどのようにとらえるかという問題提起には、２つの対象エリアが挙げられる。

（1）「原始キリスト教」の誕生の瞬間を問うもの。「キリスト教」という名前が付けられるに至った運動体は、イエスが活動して死んで発生したパニック状態に原点を持つ。いわば、そのパニックからの回復運動である。これに関しては、２年程前に助手の方たちを中心に講演でお話したことがあるのでここでは、省略する。

（2）キリスト教の「教え」の理解と批判を問うもの。これは、当学部における「心理・思想・倫理・歴史」の宗教系４分野の中で、「思想」の担当者の課題であるので、ここでは言及しないことにする。

3. イエスをどう見るか ――「新約聖書学」への招待

そこで今日は、キリスト教の根本にある「イエス」について新約聖書学ではどういう風に見

られているか、見られるに至ったかについてお話する。それは、教会の中でどのようにイエスを宣べ伝えるかということとは視点が異なる。

（1）前置き

イエスは、「キリスト教の創始者」であると言われているが、その際「キリスト教」とは、イエスをキリスト（救済者）と信じる宗教であるといわれている（キリスト教の常識的定義）。しかし、イエス即キリストと信じたのは、実はイエスの外側の人である。歴史上のイエス自身が自らをキリストと信じていたかというと、今の新約学者の過半数が、イエスは自分をキリストであると思ってはいなかったとみていると言って良い。キリスト教は、イエス以外の後の人がイエス即キリストであるとして始めた宗教である。仏教の場合はそれと違って、釈迦牟尼が自ら始めた宗教で、その教えが現代にまで伝わっている。したがって、どんな宗派でも釈迦牟尼に直結している。キリスト教の場合には、イエスにつながる直前に一種の屈折現象がある。

では、実際のイエスという人間はどのように生きて行動したのか。

（2）生い立ち

イエスは紀元前数年頃、パレスチナの北部ガリラヤ地方のナザレという村に生まれた。イエスは長男で、その下に数人の兄弟姉妹がいた。生業は木材加工業（「大工」）であった（マルコ6：3）。

「イエスの生涯」という本がたくさんあるが、それは「生涯」を僭称しているのであって、実際のイエスの「生涯」は分からない。上述の誕生のおおよその年代以外、誕生してから公の活動を始めるまでの30何年かは、全くの空白だからである。その間、全く普通の人として生きていたものと思われる。また、登場してから死ぬまでの間はだいたい1年半から2年弱であって、極端に短い。この点、公に40年も活動した釈迦牟尼とは大変異なる。

（3）洗礼者ヨハネの登場（28年CE頃、ルカ3：1）

イエスは初めから完成体として出てきたと私たちは一般に理解しがちである。しかし、よくみるとイエスは登場してから死ぬまでの1年半から2年弱の間に、やはり「進化」している。彼がまず、それまでと違った最大の飛躍を遂げたのは、おそらくヨハネが登場した時のことである。「洗礼者」と渾名された、世の終わりを宣言する預言者ヨハネが現れ、イエスはその彼のことを人づてに聞いたらしい。これが運命的な転機を生んだと思われる（以下、叙述のキーとなる章句をかかげておく）。

○**マルコ1：4－9**「洗礼する者ヨハネが荒野に現れ、罪の赦しとなる回心の洗礼を宣べ伝えていた。そして、ユダヤの全地方とエルサレムの全住民とが彼の許に出て行き、自らの罪を告白しながら、ヨルダン河で彼から洗礼を受けていた。ヨハネはらくだの毛衣を着、腰には皮の帯を締め、蝗と野蜜を食べていた」。

○**マタイ3：7－9／ルカ3：7－9**「…ヨハネは言った、『蝮の裔（すえ）め、やがて来る

べき怒りから逃れるようにと、誰がお前たちに入れ知恵したのか。ならば回心にふさわしい実を結べ。そして、俺たちの父祖はアブラハムだ、などと心の中でうそぶこうとするな。なぜなら、私はお前たちに言う、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起こすことができるのだ。すでに斧が木々の根元に置かれている。だから、良い実を結ばぬ木はことごとく切り倒され、火の中に投げ込まれるのだ』」。

この語りの報を耳にし、イエスは発心して家を棄てる。そして、ヨハネのもとへ下り、洗礼を受ける。

○ マルコ1：9「するとその頃、ガリラヤのナザレからイエスがやって来て、ヨルダン河でヨハネから洗礼を受けた」。

ここでいう「洗礼」とは、水の中に浸って、自分の罪を告白すること（浸礼）である。普通イエスは、「罪人」という意識を持っていたとは思われていない。「罪以外の点では我々と同じように誘惑されたけれども、罪におちることは一切なかった」（ヘブライ書4:15など）とされている。しかし、それは歴史的には疑わしく、実際イエスが洗礼を受けたという事実が、イエスの「罪」の意識――自己の中にある闇の力の意識――を表すものであると私は思う。記録にはないが、おそらくイエスは、何ヶ月かヨハネのところにいたはずである。しかし、「ヨハネが下層階級を集めて何か非常に危険なことをしている」という噂が広がり、ヨハネを怖れた当時の為政者がヨハネを逮捕して、首をはねてしまう（オスカー・ワイルドの有名なサロメの話というのは、大部分フィクションである）。そしてこのヨハネの死が、おそらく再度の転機となった。いわばイエスは、師である洗礼者ヨハネを超えて、決定的に重要な視野を悟得したのであろう。

（4）活動

したがって、ヨハネの死後、イエスはヨハネとは全く違う形態の活動を始める。イエスは、洗礼活動を自分では絶対にしなかった。また、人々を荒野に導くということもしなかった。彼自身が町に、人々の中へ入っていった。

ヨハネは強迫的な人で、そのヴィジョンは、「審きの神が現れて、罪の赦しを請わぬ、洗礼を受けぬ輩をすべて滅ぼす」というものであった。しかし、イエスの言葉にはそういう強迫的な要素は大幅に後退している。根本的な視野の変貌である。

ｉ）ヴィジョン――「神の支配」の貫徹とその完成の開始

もちろんユダヤ人なら、「神の支配」（神の王国）というものは初めから存在していると信じていた。イエスも例外ではない。ただ、その存在する姿が、まもなく潜在態から顕在態へ、それも完成態へと変化するというヴィジョンが生じている。ヨハネの場合は、待望されるのは強烈な破滅の現象だったが、イエスの場合は、まもなくすばらしい世界がやってくるという、肯定的現象の色彩が強い。

もっとも、現在に至るまで、未だそういう事態は来ていない。少なくとも、イエスが待望

した“まもなく”という大団円は過去2000年の間には生じていない。その意味で、今から見れば、イエスは時間の把握を間違っていたといえる。ただし、それでも、そのように浮上した幻想に基づいて彼が行動的になしたことは、意味がないわけではない。ここに事態の面白さがある。

そもそも、「神の支配」する「神の王国」というのは、人間が人間を差別して支配することがない世界である。また、「神の王国」がやってくると、悪しきもののことごとくが終焉し、したがって「死」も滅び、命は永遠となる。そういう差別のない、命のみの世界は、隠れた姿でならすでに貫徹している、そしてやがて明らさまになるとイエスは考えていた。それは一つの徹底的オプティニズムの形を示している。ヨハネではそこまでのオプティニズムはでてこない。それが明確に意識の表面にでてきたのがイエスの特徴の一つといえよう。

○**マタイ6：28‐30／ルカ12：27－28**　「野の草花がどのように育つか、よく見つめよ。労することをせず、紡ぐこともしない。しかし私はあなたたちに言う、栄華の極みのソロモンですら、これらの〔草花の〕一つほどにも装ってはいなかった。もし、今日生きていても明日は炉に投げ込まれる野の草を〔すら〕、神はこのように装って下さるのであれば、あなたたちをなお一層〔装って〕下さらないはずがあろうか、信頼の薄い者らよ」。

○マ**タイ10：29／ルカ12：6**　「二羽の雀は一アサリオンで売られているではないか。しかしその一羽ですらも、神なしに地上に落ちることはない」。

○**マタイ10：7‐8／ルカ10：9**　「そしてその中で病弱な者たちを治せ、そして彼らに言え、『神の王国はあなた達に近づいた』と」。

これらは有名なイエスの言葉である。神が徹底的に守ってくれるから、そのままで何の怖れもないのだということを示している。これにより人々の生の不安を解体している。イエスの大きな特徴である。

ii)「神の支配」の証としての＜パフォーマンス＞ ―― 新しい共生空間の創造

差別のない世界すなわち「神の王国」がまもなく決定的に顕在化するであろうと信じたイエスは、「神の王国」がやってきたらどうなるかということを、目の前で先取りしてやってしまう。いわば「神の王国」を演じてしまうのである。それは一つの「共生空間」の創造である。

ａ．それは何よりも、没落・被差別民衆（罪人、取税人、売春婦、乞食、病人等）中心の共生空間であった。イエスが活動していたガリラヤという地域は肥沃な土地であるが、その豊饒さを享受したのは、一般民であるよりは一部の富裕者であった。あそこに行けば仕事があるだろうと多数の人々が流入してきていたが、それが社会の流動化に拍車をかけ、貧富の差は拡大の一途を辿った。

ここでイエスは、「神の王国」が来たら、被差別民が「被差別者」でなくなる、皆一つになるということをパフォーマンス的情熱で説こうとする。

○**マルコ2：15-17** 「さて、彼〔徴税人レヴィ〕の家でイエスが食事の座につく。すると、多くの徴税人や罪人が、イエスやその弟子たちと共に食事の席についた。彼の後に従っていた彼らは、実に大勢いたのである。するとファリサイ派の律法学者らが、彼が罪人や徴税人と食事をしているのを見て、彼の弟子たちに言い始めた、『なぜ彼は、徴税人どもや罪人らと一緒に食事などするのか』。そこでイエスは〔これを〕聞いて彼らに言う、『丈夫な者に医者は要らない、要るのは病んでいる者だ。私は「義人」たちを呼ぶためではなく、「罪人」たちを呼ぶために来たのだ』」。

被差別民衆と一緒に食事をし、愉快さと笑いの中で過ごすということは、被差別民衆と自分とは全く差がないということのデモンストレーションである。イエスからすると、これが「神の王国」がやってきたときに起こる光景なのである。

しかしイエスは、周りの人からそれ故に悪しざまにいわれた。

○マタイ11：19／ルカ7：34 「彼らは言う、『見ろ、大飯ぐらいの大酒呑みだ。徴税人どもや罪人どもの仲間だ』」。

「徴税人」は、当時一般民衆から間接税を取り、そのほとんどを自分達の懐に入れていた悪い人間の代表として憎まれていた。そういう人たちの仲間だというのは最大の侮辱であった。それに対し、イエスは、

○**マタイ21：31** 「アーメン、私はあなた達に言う、徴税人と売春婦たちの方が、あなた達よりも先に神の王国に入る」。

○**マタイ5：3／ルカ6：20** 「幸いだ、乞食達、神の王国はあなた達のものだ」。

これらはひどく挑戦的な言葉である。

b.「敵意」の無化

○**マタイ5：44-48／ルカ6：27－28，32－36** 「あなたたちの敵を愛せよ、そしてあなたたちを迫害する者のために祈れ。そうすればあなたたちは、あなたたちの父の子らとなるであろう。なぜならば父は、悪人たちの上にも善人たちの上にも彼の太陽を上らせ、義なる者たちの上にも不義なる者たちの上にも雨を降らせて下さるからである。というのも、あなたたちを愛してくれる者たちを愛したとて、あなたたちは何の報いを受けるというのか。また、あなたたちの兄弟たちだけに挨拶したとて、あなたたちは何の優れたことをしているというのか。だから、あなたたちの父が慈しみ深いように、あなたたちも慈しみ深い者となれ」。

a.で見せたように、イエスは「喧嘩早」くもあったが、一切暴力・武力は使わなかった。ここにイエスの最大の特徴の一つがある。行動的非暴力主義とでもいうものである。「敵」が見えなくなるということではない。「あなたたちの敵を愛せよ」という言葉は、「敵」を知っている。しかし、こちら側の「敵意」は徹底的に無化されている。「父は、悪人たちの上にも善人たちの上にも彼の太陽を上らせ、義なる者たちの上にも不義なる者たちの上にも雨を

降らせて下さるからである」という言葉は、自己を徹底して相対化した視点を顕している。

○**ルカ10：30‐36** 「ある人がエルサレムからエリコに下っていく途中、盗賊どもの手中に落ちた。彼らは彼の衣をはぎ取り、〔彼を〕めった打ちにした後、半殺しにしたままそこを立ち去った、すると偶然にも、その道をある祭司が下って来た。しかしその人を見ると、〔道の〕向こう側を通って行った。また、同じように一人のレビ人も〔現れ、〕そのところへやって来たが、〔その人を〕見ると、〔道の〕向こう側を通って行った。さて、あるサマリヤ人の旅人が彼のところにやって来たが、〔彼のあり様を見て〕断腸の思いに駆られた。そこで近寄って来て、オリーブ油と葡萄酒を〔彼の傷に〕注いでその傷に包帯を施してやり、また彼を自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って、その介抱をした。そして翌日、二デナリオンを取り出して宿屋の主人に与え、言った、『この人を介抱してやって下さい。〔この額以上に〕出費がかさんだら、私が戻ってくる時あなたにお支払いします』。この三人のうち、誰が盗賊どもの手に落ちた者の隣人になったと思うか」。

これは、「よきサマリア人のたとえ」といわれるものである。ここでいうサマリア人とは「サマリア教徒」のことである。サマリア教徒は、ユダヤ教の一分派で、ユダヤ人にとっては、喧嘩別れしたろくでもない馬鹿者であり、軽蔑の対象であった。このことを前提にしてこの話を読むと、盗賊に襲われたのはユダヤ人であって、自分が軽蔑しているサマリア教徒に助けられるという、唖然とするような話である。ここにも、人生とは「敵」と思っているような人に助けられるようなものだという、「敵意の無化」の視点がある。

ｃ.「暗黒」の直視

今から述べることは、あくまでも私の説であり、必ずしも今の新約学が言っていることではない。しかし私はあえてイエスにおける「暗黒」の直視、つまりイエスの罪意識の深さについて述べてみたい。

先程、「洗礼を受けたということは、イエスの罪意識なしには理解できない」と言った。やはりイエスの中に、自分のエゴイズムの闇への直視があると見ざるをえない。

どの教会でも礼拝の中で必ず一度は唱える有名な「主の祈り」という有名な言葉がある。

○**マタイ６：12／ルカ11：4** 「私たちの負債をお赦し下さい、私たちに負債ある者たちを、私たちも赦しましたように」。

この「私たち」には、イエスも含まれているとしか私には読めない。

もう一つ、ヨハネ福音書の中に紛れこんだ伝承で、一般に「姦淫の女」の話といわれているものがある。

○**ヨハネ8：2－11** 「早朝、彼はまた神殿〔境内〕にやって来た。民は皆〔次第に〕彼の許へ来た。彼は座って彼らに教え始めた。律法学者たちとファリサイ派の人々が、姦通の最中に捕らえられた女を連れてくる。そして彼女を真ん中に立たせ、彼に言う、『先

生、この女は姦通している現場で捕らえられました。モーセは律法に、このような女共は石で撃つようにと、私たちに命じました。さて、あなたは何と言われますか』。これは、彼を訴えることが出来るよう、彼を試みて言っていたのである。イエスはかがみ込んで、指で地面に書き付けていた。彼らが〔しつこく〕たずね続けていると、彼は身を起こして彼らに言った、『あなた達の中で罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい』。そして、再び身をかがめて地面に書いていた。彼らは〔これを〕聞くと、年長者達から始め、一人また一人と去って行った。そして、彼だけが、真ん中にいた女と共に残された。イエスは身を起こして、彼女に言った、『女よ、彼らはどこにいるのか。誰もあなたを断罪しなかったか』。彼女は言った、『主よ、誰も』。イエスは言った、『私もあなたを断罪しない。行きなさい』」（以上、二次的箇所は削除）。

普通、イエスは神のごとき者であって、その神的な恵み・愛情から、「あなたを断罪しない」と言ったと教会は読むが、新約学的な私見では、「私もあなたを断罪しない」とは、私も今去って行った者たちと同じだからあなたを断罪できないという意味に理解しうる。要するに、イエスには、自己をえぐる「罪」の意識が深くあったのではないかと思われる。むしろ、その意識の非常な鋭利さこそがイエスの特徴であるとすら考えている。

iii. 批判行動と死

イエスがなぜ殺されたかということは、宗教的な解釈では、「イエスは我々の罪を赦すために死んだ」ということになる（贖罪思想）。歴史学的に見ると、イエスを殺したのはローマ帝国の支配権力であり、そしてその支配権力の下にあったユダヤの権力である。

a. エルサレム行き――現行神殿体制への批判

現行のエルサレム神殿は、巨大な経済体制で、貴族祭司を富ますための仕組みになっていた。イエスは、この現行の神殿体制に対し極めて批判的な目を持っていた。イエスの言う「神の王国」がやってくれば、神殿体制が一新されてしまう、あるいは神殿そのものが無くなってしまう。しかし、「神の王国」の先取り的行動を通して民衆を集めているイエスを、ユダヤの権力は恐れた。そしてそのためにイエスを死に定めずにおれないことになる。

他方、先ほど述べた「敵意の無化」ということから見てみると、なるほどイエスは神殿を支えていた人たちを非常に批判するが、彼らに呪いの言葉は全くかけていない。非常にきつい言葉を吐きながらも、彼らの退路を断つことはしていない。おそらく命がけで彼らの目を開かせようと思ったのであろう。そして案の定、エルサレムで逮捕され、ローマ側に引き渡されて、見せしめとして殺されてしまう。

b. 非暴力的抵抗の嚆矢

このようなイエスのあり方は、現代風に言うならば、非暴力的レジスタンスといえよう。それは伝統史的にはイスラエルの預言者たちの系譜に連なるものであり、後代におけるその影響史としては、「キリスト教」の内外における活動的非暴力主義・非武力主義の基となっ

たものである。

c. 十字架死

イ）十字架刑という処刑法

イエスの殺され方は、現代にはない凄惨な最期である。十字架というと、今ではペンダントにするような非常にきれいなものと思われているが、古代ではおぞましいギロチンのようなものであった。十字架刑というのは、苦しみの中に体力を消耗させ、ショック死や心臓発作や窒息死などに至らしめる、醜悪な殺し方である。その凄惨さ故に、十字架は城壁の外にしか立てられなかった。それは同時に、磔刑に処せられた者は、ハイエナやハゲ鷹や野犬などに襲われ続けなくてはならない、ということでもある。こうして、最後は骨だけになって死臭を曝し、その後は、共同の墓穴の中に投げ込まれる。埋葬は原則的に施されることがないのである。このように埋葬されない死に方は、特に古代では、「浮かばれない」果て方である。次の世でも何らの福に与ることのない、いわば呪われた運命を背負うのである。古代における十字架刑の恐ろしさはここにきわまり、それゆえに、十字架は属州の反乱民か、奴隷の大罪を犯した者にしか行われないものであった。

ロ）イエスの苦悩と運命の受容――第三の転機

○マルコ15：4－5 「そこでピラトゥスは再び彼にたずねて言うのであった。、『お前は何も答えないのか。見よ、彼らはやっきになってお前を告発しているのだ』。しかしイエスは、もはや何一つ、まったく答えなかった。そのためにピラトゥスが驚くほどであった」。

○マルコ15:37 「イエスは大声を放って、息絶えた」。

イエスは逮捕されるまでは、厳しく、雄弁に語っていた。しかし、いわゆるゲツセマネの苦悩の場面を経、逮捕されると、イエスはもはや何も語らない。そして先に述べたような意味の十字架の死を甘受しつつ、果てていった。あるいはこの沈黙の間、イエスには「第三の転機」とでもいうべきものが訪れたのであろうか。

(5) 生々しいイエス像の発掘へ

今の新約聖書学でのイエスの研究は、「生々しいイエス」像の発掘に向かっている。美しく映像化された神人イエスは、理想化・神格化され過ぎたものであり、それを剥ぎ、いわば徹底的に「人間的」なところに持っていこうとするのである。そのようにした方が、「キリスト教」の根源にいるとされるイエスの切迫性を逆に感じさせられるように思う。しかしその「切迫性」というものは、同時に、単純に「人間的」次元にイエスを還元するというだけで十全に解明したことになる質のものでもない。おそらく終局的には、一種の異様な謎として最後まで残存するものであろう。